

2022年 3月 29日

日本災害復興学会 2020年度研究会
活動実績報告書

<研究会名称>

復興パラダイム研究会

代表者	近藤誠司
企画分担者	石原凌河
	宮本 匠
	李 勇昕
	宮前良平
	大門大朗
	立部知保里
	高原耕平

<添付資料>

- ・活動に関する資料（パンフレット等）がございましたら、添付のうえご提出願います。

1. 本助成により実施した研究活動の全体概要

本助成により実施した研究活動のアウトラインを記入してください。なお、各項目における記入方法は、上段には概要を箇条書きで2行程度にまとめていただき、下段には、その内容を記入してください。

【課題、目的】 この研究活動を行った動機や目的を記入してください。
<ul style="list-style-type: none">・復興ワードマップ研究会の議論を継承して洞察を深めていくことを目的とする・右肩下がりの現代日本社会における新たな復興のビジョンを検討することを目的とする
<p>当研究会「復興パラダイム研究会」は、前身となる「復興ワードマップ研究会」（2018年度～2019年度に日本災害復興学会の中に設置）の議論を発展的に継承していくために提起されたものである。</p> <p>前身となる研究会では、復興をめぐる「ことば」に着目して、時代の閉塞状況やブレイクスルーの萌芽などを探索してきた。当会では、照準を「パラダイム」として、さらに広い視野で、復興のビジョンを検討していくことを目指した。</p> <p>特に、現在日本社会は、特に経済や人口などの状況に見られるとおり、“右肩下がり”であることが前提となっているため、社会が縮退しているなかでの復興のありかたを探索していくことが求められている。このような問題意識をふまえて、できるかぎり幅広い学問領域の知見を渉猟して、洞察していくことにした。</p>



【実施方法、内容】 この研究活動の実施方法、内容を記入してください。
<ul style="list-style-type: none">・連続的な勉強会を実施して、その成果をウェブサイトで公開する。・学会大会の分科会において成果を発表し、さらに検討を進める。
<p><勉強会の実施></p> <p>2020年3月17日 「ことばとわざわざい」 *実施機関の前にキックオフ</p> <p>2020年5月12日 「災害復興のパラダイムロストとパラダイムリゲインド」</p> <p>2020年9月18日 「各メンバーが関心を抱いているパラダイムを持ち寄り検討」</p> <p>2021年5月19日 「集合的トラウマに関する考察」</p> <p>コロナ禍の状況を勘案して、すべてオンラインで実施した</p> <p>復興ワードマップ研究会の成果と併せて、復興パラダイム研の議論の要旨をウェブサイトで公開</p> <p>http://kondoseiji.main.jp/wordmap/</p>
<p><分科会発表></p> <p>2021年9月19日 日本災害復興学会・分科会</p> <p>「害復興パラダイムを考える カイ・エリクソンの「集合的トラウマ」の概念を手掛かりとして」指定討論者として、特定非営利活動法人・高田暮舎の越戸浩貴さん（岩手県陸前高田市在住）を招いて、カイ・エリクソンが提起した「集合的トラウマ」の概念を再考した。半世紀前にアメリカで発生した洪水災害を調査したカイ・エリクソンは、個人的なトラウマの観点からだけでは説明しきれない「コミュニティ（共同性）」に根差した喪失、すなわち「集合的トラウマ」があることを主張している。この概念のポテンシャルを掬い出せば、具体的な個人の事情にこだわり過ぎて議論が拡散してしまう陥穽や、抽象的な社会の事情にとらわれ過ぎて、サンプル群を統計的に操作することでわかったつもりになる陥穽を乗り越えられるのではないかと考えた。</p> <p>当該分科会の概要は、日本災害復興学会のウェブサイトで公開</p> <p>https://f-gakkai.net/lessons-and-learned/2631/</p>



<p>【活動成果】 この研究活動で得られた成果を記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復興のありかたを考えるうえで、いくつかの視座を確保することができた。 ・個人／集団／社会、地域／コミュニティ、抽象／具体、一般／個別など、コンセプチュアルな観点における対抗軸のイメージも明瞭になってきた。 <hr/> <p>たとえば、「集合的トラウマ」の議論でも焦点化していたとおり、ある地域における状況を、リージョナルな意味で「コミュニティ」のまとまりがあるものとして想定するのか、それとも、社会文化的な意味で「コミュニナリティ」があるものと想定するのかによって、関係当事者が確保できる視座のありかたが異なってくる。この点に関して、当会では、骨太な議論をすることができた。</p> <p>また、前身となる「復興ワードマップ研究会」でも議論してきたとおり、復興をマネジメントするというかわりが、かえって個々の暮らしの再生を疎外する事態が生じていて、そこには、合理性や効率性というドライブが潜んでいることが多いことが明らかとなった。これは、いわゆる成長主義的な考え方が当たり前であった時代にはフィットしている（齟齬が見えにくい）こともあったが、“右肩下がり”の現代日本社会においては、間尺に合わない現場も増えてきている。この点において、当会が取り組んだ、閉塞した事態を超克するためのパラダイムを探索したり彫琢したりするアプローチの重要性が、まざまざと浮かび上がってくる。もちろん、近代的な価値観を否定すれば、単純に現代的な意義が見出せるというわけではない。本当の意味での「コミュニナリティ」、真なる意味での「マネジメント」ということ、確かな意味での「復興」のありかたというものを、さらに考察することが求められるだろう。</p>

2. 本助成により実施された研究活動に関して補足説明することがあれば記入してください。

(例：実施した研究活動の社会的意義、独自性及び改善点、今後の活動予定等)

<p>復興のありかたは、社会や時代の要請と密接に結びついているがゆえに、理論的にも実践的にも、深く洞察しながら歩んでいく必要がある。世界に目を遣れば、ロシアとウクライナの紛争地においても、「復興」の意義が鋭く問われ、日本のコミットメントを求める声もある。そうしたなかで、災害復興学の知見が活用されていくとよいだろう。</p> <p>当会の活動は、日本の若き研究者を中心に日本やアメリカの議論をステップボードにするかたちで進められたが、しかしその視野は広く世界に向けて開いていく必要があるものと考えている。</p> <p>今後も、当会のネットワークをクローズすることなく、ウェブサイトにおける情報発信などの活動を続けていく所存である。</p>
--